

はみだしコラム①～「白波賊と南匈奴」

白波と言えば盗賊のことを指し、歌舞伎でも義賊が活躍するものを「白浪(しらなみ)物」と呼びますが、その語源となったのが白波賊です。河東郡北部、平陽県の近くにある白波谷に割拠して白波賊と呼ばれました。188年に黄巾残党の郭泰を首領とする十万余りの集団が蜂起して太原・河東を襲い、翌年董卓の娘婿牛輔の討伐を撃退し強勢を誇り、前將軍の趙謙に敗れるも許されてある程度の軍勢を保持し続けたようです。

頭目のひとりの楊奉は李傕の部下となり、献帝を連れて洛陽へ向かう途中で宋果と共に反乱を起こすも敗れて、共に洛陽に向かっていた董承に味方します。ここで元白波将帥の李樂・韓暹・胡才および南匈奴右賢王の去卑が呼ばれ、河東太守王邑、河内太守張楊と共に李傕・郭汜の追撃をかわしながら洛陽まで献帝を護衛します。196年7月、洛陽に到着した董承・楊奉・韓暹・張楊らにより政権が樹立されますが翌月董承が曹操を呼び寄せて献帝を許に移し、楊奉・韓暹は曹操に敗れて袁術を頼って落ち延び、最終的には楊奉は劉備に殺され、韓暹は故郷に戻ろうとして斬られました。李樂・胡才も河東に戻った後に死んでいます。

南匈奴は単于の於夫羅が平陽を本拠としており、於夫羅が死去した後も右賢王の去卑は白波に協力していました。白波勢力が衰退すると袁紹に近づいていたようで、袁尚の命令で河東に攻め込んだ高幹・郭援に協力しています。曹操の命を受けた司隸校尉の鍾繇は馬騰を説得して味方につけるとその部下の龐惠および子の馬超を率いて平陽を攻撃し郭援を討ち取り、匈奴を降伏させました。

徐晃は楊奉の元部下ですがこれは白波賊の一員だったことを示しています。また蔡邕の娘の蔡文姬は匈奴にさらわれましたが平陽に連れて行かれたのでしょう。『悲憤詩』で歌われる境遇は思ったより洛陽から近い場所だったのです。

はみだしコラム②～「戦う王允」

王允といえば漢王朝の大臣で養女の貂蟬と共に「連環の計」を張り巡らせて呂布をそそのかし董卓を暗殺させた策士というイメージですが、後漢書王允伝によれば黄巾の乱が勃発すると最も反乱が盛んな地域の一つであった予州の刺史に任命されて黄巾と戦いました。

予州では黄巾の頭目の波才が皇甫嵩を破り、皇甫嵩は潁川郡の長社で籠城を強いられました。また汝南太守の趙謙も召陵県で黄巾に敗れ、部下の袁秘らが命と引き換えに趙謙を逃がすなど、当初は官軍が大苦戦していました。そんな中、王允は黄巾の別動隊を破り、最終的には皇甫嵩・朱儁と共に黄巾数十万を破ってその降伏を受ける活躍を見せました。

王允は若い頃から功績を立てる大志をもち、常に書を読み騎射の練習を朝夕行っていました。当時の士大夫のたしなみの一環として馬上で弓を射る練習を積んでいたのです。平時には政治に従事し、いざという場合は軍を率いて異民族や反乱軍と戦うという文武両道が当時の理想であり、王允もそれを目指していたのでしょう。この理想形は後の時代の言葉ですが「出でては将、入りては相(出将入相)」とも表現されます。予州刺史以前に王允が軍役を担った記録は残っていないさそうですが、并州太原郡という出身地で郡の役人を務めていたので異民族との戦いの経験があったのかもしれない、また経験が少なかったとしても、当時の士大夫としていつでも軍役を担う覚悟を持っていたのでしょう。

ちなみに王允は予州刺史に就任すると荀爽と孔融を従事に招聘しています。この従事が別駕従事や治中従事のことだとすると王允の重要な補佐役として登用されたことになりますので、彼らも王允に従って黄巾と戦ったのでしょう。ゲームでは「文官」扱いのこれらの人物も実際には当然のように戦場に赴いていたのです。

はみだしコラム③～「戦乱の予州刺史の整理を試みる その1」

予州刺史の変遷

※筆者の解釈です。色々な解釈があり得ますので皆さんもぜひ考えてみてください。

朝廷系: 孔伷(董卓政権)→郭貢(李傕政権?)→劉備(曹操政権)→劉勲兄(曹操政権)

袁術系: 孫堅→孫贇→?

袁紹系: 周昂(周囑)→陰夔?→劉備

189 年末頃: 董卓は周毖・伍瓊らの推薦に従い孔伷を予州刺史に任命。しかし孔伷は反董卓となる。

190 年末頃: 孔伷が病死。袁術は魯陽で孫堅と合流し、孫堅を予州刺史に推挙。梁県で孫堅は董卓の部下の徐榮に敗れる。

191 年: 孫堅は陽人で董卓軍を破って華雄を斬り、洛陽を奪還する。袁紹は周昂(周囑?)を予州刺史に任命して孫堅の陣地を襲わせる。孫堅と公孫越は周昂と戦い、公孫越が戦死する。

192 年: 孫堅が劉表攻撃中に戦死(死期は他に 191 年説など諸説あり)。

193 年春: 袁術は兗州に攻め込むが曹操に敗れて揚州に移動。孫堅の甥の孫贇が袁紹により九江太守に任命された周昂と周囑を破ったので、袁術は孫贇を予州刺史とした。周囑は故郷の会稽に帰ったが殺された。

194 年: 呂布が兗州で曹操に反乱。予州刺史郭貢は数万の兵で甄城に向かい荀彧と面会するも撤退。

196 年: 劉備は呂布に徐州を追われて曹操を頼り、予州牧に任命された。

199 年末: 劉備は徐州刺史車胄を殺害して曹操に反乱したが討伐されて袁紹を頼った。

200 年: 袁紹は劉備に命じて汝南黄巾の劉辟らと共闘させ、曹操の後方を襲ったが曹仁に敗れて劉備は撤収した。袁紹は再び劉備を汝南に送り込んだが劉備は曹操が送り込んだ曹仁の討伐を受けて劉表のもとに落ち延びた。

はみだしコラム④～「戦乱の予州刺史の整理を試みる その2」

特に謎が多い予州刺史

郭貢(朝廷系?): 呂布が曹操に反乱を起こした際に数万の兵を率いて荀彧と面会したというたった一箇所の記載のみ。袁紹はこの頃はまだ曹操を支援しているので袁紹系の可能性は低いように思います。袁術系だとすると孫堅と孫贇の間に短期間任命されていたことになりますが、袁術は 194 年には揚州で孫策に兵を与えて盧江太守陸康と戦っており、さらに数万の兵をはるばる兗州に火事場泥棒的に送る余裕があるかは疑問です。また短期間の就任では予州の兵を多数動かすことも難しいでしょう。董卓あるいは李傕に送り込まれた朝廷系で、陳王劉寵や沛相の陳珪らの協力を取り付けて兵を兗州に送り込んだと思われます。

陰夔(袁紹系): 袁尚の部下として登場する元予州刺史。袁尚が後を継いだ 202 年から陳琳と陰夔が曹操に降る 204 年の短い間に予州刺史に就任してすぐに任を離れたと考えられなくもないですが、袁紹時代と考えるほうが自然でしょう。袁紹が最初に任命した予州刺史は周昂(ないし周囑)で、揚州で袁術の予州刺史である孫贇に敗れ、周囑は故郷の会稽で殺され周昂もその後の記載はありません。もう一人袁紹の予州牧が分かっているのは他でもない劉備です。劉備は予州牧として徐州で曹操に反乱し、敗れて袁紹を頼った後も袁紹に二度汝南に派遣されて曹操を牽制し、袁紹の同盟者である劉表のもとに落ち延びました。おそらく袁紹が死ぬ時まで劉備は袁紹に予州牧として承認されていたのでしょう。消去法的に陰夔は周昂と劉備の間の予州刺史と推測できます。

劉勲の兄(朝廷系): 199 年に劉備に離反された曹操は予州牧劉備の正当性を否定するために恐らくすぐに代わりの刺史を任命したと思われます。劉勲は袁術没後に孫策に敗れて 199 年には曹操に帰順しています。劉勲は若い頃の曹操と交流があったようで、かなり厚遇されており、その兄が刺史に就任することも有り得るでしょう。

はみだしコラム⑤～「太守のしごと」

後漢では全国を百くらいの郡に分割し、太守を朝廷から派遣して治めさせました。後漢書百官志によれば太守の役割には以下のようなものがありました。

- ・民を治め、賢者や功績のあるものを推薦する
- ・訴訟に決を下し悪を取り調べる
- ・春に管轄する県を巡回して農業養蚕を奨励し貧しいものを救済する
- ・秋冬には囚人をチェックし、官吏の勤務評価を行う
- ・年の終わりに中央に上計吏を派遣して貢納・報告を行うと共に、郡の優秀な該当者を孝廉に推挙する。

また治安も司り、大きな盗賊が発生すると兵を率いて討伐を行うこともありました。行政・司法・軍事をカバーする大きな権限を持っていたのです。後漢末の戦乱では徴税および軍事の権限があったことから各地の太守が大きな活躍を見せることになりました。

ちなみに洛陽がある「河南尹」、長安がある「京兆尹」は郡ではなく「尹」と呼ばれ、より大きな権限・部下の数をもち、長官も太守ではなく「尹」と呼ばれました。また漢王朝の皇族が配置され名目上はその領地とされた「平原国」などの「国」には「相」が置かれました。国王には権限はあまり無く、相が太守同様に大きな権限を持ちました。また辺境の広い郡を治めるために「遼西属国」などの「属国」を置き、特に異民族への対策を行うこともありました。この属国の長官は「都尉」と呼ばれました。都尉は辺境以外にも強力な賊が発生した郡に臨時で配置されることもありました。

はみだしコラム⑥～「冀州の太守たち」

後漢書袁紹伝の注「献帝春秋」には「袁紹は冀州の十郡の太守と国相ら数十万の民衆を合わせて壇に登って盟した」とありこの内容を信じれば冀州の太守はみな袁紹・韓馥に従って反董卓の連名に参加していたことが分かります。このページの各郡に挙げられている太守・国相の多くがこの連盟に参加したと思われますが、その後甘陵相姚貢のように冀州を乗っ取った袁紹に追い出された者もいれば、公孫瓚が冀州を席捲して太守や県令を自分の息のかかった者たちに入れ替えた際に追い出された者もいます。常山相孫瑾はその後劉虞に仕えて公孫瓚に屈せずに殺されているので、この中の一人かもしれません。

また趙雲はこのタイミングで郡に推挙されて公孫瓚に仕えたのでしょう。

この頃の冀州の太守で有名な人物には董昭が挙げられます。董昭は黄巾の乱の頃から冀州各地の県令を務め、袁紹の命で鉅鹿郡に太守として派遣されて郡全体が公孫瓚へとなびくのを防ぐ活躍をしています。歴史の敗者であるせいか、袁紹配下の太守の名前はほとんど残っていません。しかし後に曹操に仕え魏の重鎮となったために董昭の事績は記録に残ることになりました。

はみだしコラム⑦～「黒山賊の派閥」

石井仁による論文「黒山・白波考」でも指摘されていますが黒山賊は三国志に列伝されている張燕が全体を率いていたというよりは、張燕を中心とした主に常山郡を本拠とした集団と、河内郡の黒山を本拠とした于毒を中心とした集団の二つに分かれていました。

于毒は 191 年に袁紹が韓馥から冀州牧の地位を奪うと白繞・眭固と共に魏郡に攻め込んでいます。迎撃した東郡太守の王肱を破りますが、援軍にきた曹操が白繞を破りました。翌年于毒・眭固は曹操の本拠の東武陽を攻撃しますが曹操が于毒の本拠の黒山を攻撃し、急いで引き返した眭固を破り、さらに黒山に味方した匈奴の於夫羅を魏郡の内黄で破りました。

193 年、袁紹が公孫瓚を破った頃に于毒はその間隙を狙って魏郡を攻め取って太守の栗成を殺害しました。長安政権から送り込まれた冀州牧壺寿を受け入れ、また袁術の兗州攻撃と時期を同じくする戦略的な攻撃でした。しかし陶升が黒山側から袁紹に寝返り袁紹やその臣下の家族を守って送り届け、袁紹は黒山に攻め込んで于毒・壺寿を斬り、さらに北上しながら左髪丈八を斬り、劉石、青牛角、黄龍、左校、郭大賢、李大目、于氏根ら頭目の砦を破壊して追い出し于毒集団を壊滅させました。残党は河内太守張楊に吸収されたようで眭固は後に張楊を殺した楊醜を討って張楊軍を引き継ぎ、最後は曹仁の討伐を受けて死亡しました。また張白騎(張晟)は 205 年に高幹が曹操に背いた際に同調しています。

張燕は黄巾の乱の後に朝廷に帰順して平難中郎将に任命され、黒山賊は太守同様孝廉を推挙する権限を得ます。于毒敗死後に袁紹と戦うもたまたまその時に袁紹に身を寄せていた呂布に敗れ、その後も易京に籠った公孫瓚へ杜長を援軍に送るなど袁紹への抵抗を続けますが勢力は弱まり、204 年に頭目の孫輕と共に曹操に帰順しました。

はみだしコラム⑧～「陶謙の徐州統治」

陶謙は 188 年に就任して黄巾を平定し、192 年には徐州の中の各太守・国相らに加えて北海相孔融、汝南太守徐璆、沛相袁忠らと連名で朱儁を旗頭とした第二次反董卓連合とも言える集団を立ち上げています。表面上は徐州の全ての郡を掌握して盤石のように見える陶謙ですが、史料を読み込んでいくと実は随所にほころびが見られます。

黄巾の乱では共闘していた陶謙と臧覇ですが、その後は臧覇・孫觀・呉敦・尹礼らは琅邪郡の開陽に駐屯し必ずしも完全に陶謙に従ってはいなかったようです。

彭城国では国王の劉和が賊の昌務(昌豸と関係がありそうな人物に思えます)に襲われて兗州まで逃げるといふ、朱儁を奉じて董卓を倒し漢王朝を復興する目標を標榜している陶謙にとってはかなり痛い失態が発生しています。

下邳国では当時は新興宗教であったといえる仏教の寺院を笮融は盛んに建築して信徒を集めており、当の陶謙本人も天子を名乗る闕宣と同盟を組んでいるという状況でした。

そんな中で陶謙は曹操の侵攻を受けます。徐州の兵が兗州に比べて特に少ないとも弱いとも思えないですし、陶謙は張温に従って涼州で羌族と戦い徐州で黄巾を鎮めた歴戦の士、この時点で曹操と比べて実績に劣るわけでもありません。それでも曹操により瞬く間に蹂躪されてしまったの理由は、このように様々な弱みが陶謙にあったことにも求められるでしょう。

はみだしコラム⑨～「泰山の諸将」

臧覇はいわゆる「泰山の諸将」の首領であり、黄巾の乱(ただし徐州での反乱は 188 年のこと)で陶謙に従い活躍しました。その後は琅邪の開陽に割拠して呂布と戦いつつ、最終的には協力関係にありましたが 198 年に曹操が呂布を滅ぼして徐州を平定すると臧覇も捕らえられます。しかし臧覇は曹操に気に入られ、同じく泰山での仲間であった孫觀・呉敦・尹礼を推挙します。曹操は琅邪・北海・東海の各郡から分割して城陽・利城・昌慮の各郡を新設し、臧覇を琅邪相、呉敦を利城太守、尹礼を東莞太守、孫觀を北海相、孫觀の兄の孫康を城陽太守、そしておそらく昌慮太守に昌豸を任命しました。みな曹操に敵対していた小軍閥の長ですが、曹操は彼らのためにそれぞれ新しい郡をわざわざ設置してそれぞれの太守に任命しました。太守に任命するということは軍権と自治権を両方与えるという厚遇です。

この厚遇は石井仁も「曹操～魏の武帝」で指摘しているように曹操が虐殺を行った徐州を治めるために、直接統治するのではなく泰山の諸将を用いて間接的に統治する策であったのでしょう。

臧覇らは官渡の戦いの前後に袁譚が治める青州に攻め込んで牽制を行い、袁譚が滅びると南皮まで出向いて曹操へ家族を人質を送り忠誠を誓いました。昌豸だけは曹操に叛旗を翻して滅ぼされ昌慮郡も 206 年に廃止されました。臧覇らはその後も孫権討伐などで活躍し臧覇は徐州刺史、孫觀は青州刺史を務め、曹丕に即位を部下たちが勧めた『魏公卿上尊号奏』でも臧覇は曹真、曹休、夏侯尚と続いた一族の次の位に名を連ね、張郃・張遼ら將軍よりも上に位置しています。

臧覇の兵は曹操が死ぬと天下が乱れると太鼓を鳴らして去って行ったとあり、青州黄巾と同様に曹操とは個人的感情で繋がっていたのでしょうか。その後曹丕は臧覇から兵を取り上げ、新設した郡も廃止されて、刺史には呂虔が任命され通常の統治に切り替わっていったのです。

はみだしコラム⑩～「青州黄巾党の頭目たち」

兗州を襲った青州黄巾の人物の名前は一人も記録に残っていないようです。しかし本拠地の青州に目を向けると以下の人物の名前が見られます。

張饒: 孔融は北海相に着任すると士民を訓練して冀州攻撃から戻った張饒ら二十万と戦い敗れた。

管亥: 孔融を北海国の都昌で包囲した。太史慈は包囲を抜けて劉備に援軍を要請し、劉備は管亥軍を破って撤退させた。演義にも登場し関羽と一騎打ちで数十合打ち合い健闘するが斬られている。

徐和: 済南国の黄巾賊。各地の城邑を荒らし回っていたが夏侯淵・呂虔・臧覇らに斬られた。

司馬俱: 楽安郡の黄巾賊。徐和と共に夏侯淵・楽進に討たれた。

張饒と管亥は北海相の孔融と戦った頭目、徐和と司馬俱は官渡の戦いの後の曹操の河北平定の時期の頭目で十年ほど年代が開きます。ひとくちに青州黄巾党と言っても曹操に降伏したのは一部であって、青州にも多くの人が残り体制に抵抗していたのです。

はみだしコラム⑪～「南荊州四君主の真実」

最初に身も蓋もないことを言ってしまうのですが、史実における韓玄・金旋・趙範・劉度は独立した勢力ではありません。彼らは劉琮が降伏した後に曹操が配置した太守です。しかもすぐに赤壁の戦いが発生して曹操が敗れ、劉備が鮮やかに四郡を席捲しますが四太守の事績はほとんど記録にありません。

四太守の人気(?)はゲームにより生み出されたと思いますが、元となったのは三国演義で関羽らの活躍を引き立たせるために脚色された四太守が脇役として登場する劉備主従のストーリーです。

さらにそのルーツは元の時代の雑劇にさかのぼることができます。『走鳳雛龐掠四郡』では張飛に侮られた龐統が怒って南荊州の四郡を率いて劉備に対して反乱を起こし、妖術を用いて劉備軍を苦しめるも、諸葛亮の謝罪と関羽の活躍で最後には龐統が「実は四郡を統一してから劉備殿に差し上げるつもりだったのですよ」と無理矢理に大団円に至るストーリーです。この雑劇でも名前は少し異なるものの四太守は登場します。

この四郡を束ねる龐統ですが、原形は実は正史なのかもしれません。曹操は赤壁で敗れて北に退却する際に南荊州の守りとして劉巴を残しました。劉巴は劉備がいるので成功しないと曹操に意見しますが、曹操はその場合は援軍を出すと約束して劉巴を送り出しました。劉巴は零陵で事を図りますが失敗して交州に逃亡しました。おそらく劉備方に敗れたのでしょう。曹操は援軍を送りませんでした。韓玄・金旋・趙範・劉度は劉巴の管轄下で劉備に抵抗し、曹操の援軍が来なかったので敗退した、というのが史書から見える彼らの本当の立場なのです。

はみだしコラム⑫～「戦乱の揚州刺史の整理を試みる」

揚州刺史の変遷

※筆者の解釈です。色々な解釈があり得ますので皆さんもぜひ考えてみてください。

朝廷系: 陳温(陳禕)→劉繇→嚴象

袁術系: 鄭泰→陳瑀→袁術→恵衢

袁紹系: 袁遺

190 年: 陳温は徐榮に敗れて兵を失った曹操に丹陽太守周昕と共に四千の兵を与えた。

191 年?: 陳温が死ぬと袁術は鄭泰を揚州刺史に任命したが任地に向かう途中で病死した。袁紹は袁遺を揚州刺史に任命した。

192 年: 袁術は陳瑀を揚州牧に任命した。袁遺は敗れて沛に逃走し兵士に殺害された。

193 年: 袁術は兗州に攻め込んだが曹操に敗北して揚州に逃げ込んだ。陳瑀は袁術に反旗を翻して袁術の揚州入りを拒んだが、袁術は陳瑀を追い払い自ら揚州刺史となった。この頃、長安の朝廷も劉繇を揚州刺史に任命して送り込んだが、袁術が既に寿春を治めており劉繇は曲阿を根拠とした。袁術は恵衢を揚州刺史に任命して呉景・孫贇と共に劉繇の将の張英と戦わせたが何年も勝てなかった。

195 年: 袁術は孫策に劉繇を攻撃させ、劉繇は予章に逃亡した。

197 年: 劉繇は叛いた笮融を破って殺害したが、ほどなくして劉繇も病死した。

199 年: 曹操は嚴象を督軍・御史中丞として袁術討伐に派遣したが、袁術は病死した。そのまま揚州刺史とした。

200 年: 嚴象は孫策が任命した廬江太守の李術に攻撃されて殺害された。

はみだしコラム⑬～「刺史のしごと」

後漢では全国を十三の州に分割し、それぞれ「刺史」を置きました。刺史の主な役割は管轄の州の各郡を治める太守の評価・監査です。秩(給料)は二千石(前漢成帝以降。それより前は六百石。)で直接の軍事権は持っていません。後漢書百官志によると刺史の役割とは管轄の郡国を八月に巡回して囚人を記録し太守らの評価を行うものでした。その注釈にはより具体的に、

- ・郡国を巡回して勤務評価を行い能力があれば昇進、なければ降格させる
- ・冤罪をチェックし、あれば再度裁判を行う

とあり、また基準として豪族の横暴、太守の法令違反や汚職、太守の刑罰の乱用、太守の人事の不正の摘発や(それにより妨げられた)賢者の登用、太守の親族等関係者による不正行為、太守と豪族の連携による不正行為、などの六条件を挙げて特に取り締まりました。行政・司法・軍事に渡る強大な権限を持つ太守へのチェック機能を果たすのが刺史の目的でした。とはいえ同程度の秩禄の刺史に太守を制御できないことも多く、後漢末には黄巾の乱や辺境の州などで刺史が敗死するケースも出てきます。

劉焉の提案で刺史の代わりに軍事権を持った牧が配置された州では主導権が太守から牧に移り、各地に強大な群雄が乱立するようになっていきます。劉焉・劉表・袁紹・曹操などの軍閥はいずれも州牧を名乗り、管轄下の兵を徴発して強大な軍を編成し覇権を争いました。

はみだしコラム⑭～「益州の黄巾の乱」

後漢書に益州で 188 年 6 月に黄巾の馬相が刺史を殺して天子を称したとあり、この年に牧を配置したとあるので益州の黄巾はこの時に蜂起して鎮圧され劉焉が翌年牧として着任したと一般的には認識されています。これはおそらく『三国志』をなんとなく読んだ印象と、『資治通鑑』の 188 年 6 月の記事に馬相が挙兵したと書いてあるからなのでしょう。しかし『華陽国志』五巻には中平元(184)年に馬相らが反乱を起こし、その後各地を襲って太守を殺害し、さらに刺史を殺したとあります。『華陽国志校補図注』(任乃強 上海古籍出版社 1987)で詳細に論じられていますが、実際は 184 年から 4 年かけて馬相らは綿竹県令、巴郡太守、益州刺史を殺害したのでしょう。ちなみに五斗米道の張脩も 184 年に巴郡で蜂起しています。張角の太平道と直接の関係はないかもしれませんが、同時期に挙兵した道教集団なのでしょう。

はみだしコラム⑮～「劉璋の兵が弱いのではなく…」

柔弱で戦の経験も少なかった、などと小説で語られることもある劉璋ですが、自ら率いた経験があったかはともかく、州をまとめる立場として戦争(の報告を受けたり指示を行う)経験は積んでいたはずですよ。

まず劉璋が父の劉焉が死んで後を継いだ際に朝廷は扈瑁を益州刺史に任命して漢中に送り込み、さらにこれに呼応して甘寧らが反乱を起こしています。

この鎮圧には成功しましたが張魯との対立は続き、巴郡太守の龐羲に何年にも渡って張魯を攻撃させましたが勝てませんでした。張魯は巴夷を味方につけて劉璋に対抗し、もともと五斗米道信者が多い巴郡の一部も勢力下においでいました。この巴夷は後漢王朝が精強なる兵として異民族との戦いに歴代投入していた板循蛮のことであり、劉焉の代に味方につけた青羌の戦士たちや東州兵を擁する劉璋をもってしても勝てないほどの相手だったのでしょう。

200 年頃には劉焉の入蜀時に付き添いその死後は劉璋を擁立した宰相格の趙韞が反乱を起こし、蜀郡・広漢・犍為が呼応するという大ピンチがありましたが東州兵の奮闘により成都の包囲を破り江州で趙韞を討ち取ることができました。

劉備が蜀に招かれたのは屈強な巴夷の兵と強固な五斗米道の信仰に支えられた張魯軍を破るという難易度の高いミッションを行わせるためだったのです。

はみだしコラム⑯～韓遂の「手下八部」の史実を深掘り

三国演義で韓遂の手下八部とされる將軍たちですが、史実ではそれぞれ独立した軍閥です。

成宜は其中で大物と捉えられていたのか、献帝は「馬超・成宜を討った」と曹操の手柄を褒めています。とはいえ成宜は曹操との戦いで斬られた、とある以外の事績は伝わっていません。

楊秋は安定まで敗走した後に曹操に帰順し、魏建国後に安定郡の中の県である臨涇侯に封じられていますので、安定郡の豪族だったのでしょう。八人の中で唯一爵位が判明しています。

程銀・李堪・侯選は河東郡を本拠にした軍閥で、興平年間には既に河東に割拠していたとあります。李堪は戦死しますが程銀・侯選は馬超と共に張魯に降り、張魯が曹操に帰順すると彼らも曹操に帰順しました。

張横と梁興は『太平御覧』が引用する『典略』に李傕を攻めて斬ったとあり、おそらく裴茂・段熲が李傕を滅ぼした戦いに参加していたのでしょう。張横は曹操に敗れた後の実績はわかりませんが、梁興はその後藍田県の城塞に籠って抵抗を続け 212 年に夏侯淵・鄭渾らに斬られています。

馬玩に関しては情報がほぼありません。あるいは扶風馬氏で同族の馬超に同調したのかもしれません。

また涼州刺史韋康および楊阜・趙昂・姜叙・尹奉・閻温ら涼州人士は馬超に同調していません。曹操寄りだったのですが、その割に金城から韓遂を行きも帰りも黙って通しているようで謎が残ります。さらに曹操とは旧知の劉雄鳴、河首平漢王を自称していた宋建、羌・氐の各異民族など、「八部」以外にも様々な勢力が馬超と曹操の戦いの情勢を見守っていたはずですよ。

はみだしコラム⑰～「中国が伝聞したローマ帝国」

三国志魏書の東夷伝の注に「魏略」の「西戎伝」が長々と引用されており、西域にあるシルクロードの国々やインド北部のクシャーナ朝のことである大月氏国、パルティア王国を指す安息国のことが語られた後に、ローマ帝国のことを指す大秦国のことが語られます。また後漢書西域伝にも似た内容の記載があります。中国人が誰も行ったことがない遥か遠い国の伝聞であり、さらに儒教上の理想国として語られていることを差し引いても実際のローマ帝国の特徴を捉えています。

- ・三十里ごとに駅伝が置かれ盗賊はでない→ローマ街道とその上で運用された国営伝馬制度
- ・その国には数十の小王が置かれている→ローマの属州とその総督
- ・王の宮廷がある城は周囲が百余里→ローマの街を囲う城壁
- ・三十六人の将がいて、議事を行う場合は一人も欠けてはならない→元老院による議会
- ・王は常任ではなく賢者を選んで立て、災害等で罷免して新たに立てることがあっても罷免されたものは恨まない→(時代はさかのぼるが)共和制ローマで任期制だった執政官や独裁官

紀元 97 年に西域を制圧した班超が部下の甘英に命じて大秦国へ使者として送り出しますが、安息(パルティア)の西海(地中海の東岸か)まで来てそれ以上の旅を断念して引き返しました。

166 年には大秦王安敦(マルクス・アウレリウス・アントニウス)の使者を名乗る者が日南郡(ベトナム)に来て象牙やタイマイなどを献上して通商を求めました。しかしこれらの献上物はインドやアフリカの産物であり、ローマ側にも中国に使節を送った記録もなく、商人が偽称したものではないかと言われています。

226 年には大秦の商人の秦論が交趾に来て太守は孫権の元に送り、土地風俗を秦論は語ったとあります。

284 年にも林邑と大秦国が晋に使節を送ったとあります。林邑と同列にされており交趾経由かもしれません。

残念ながらローマ側には絹がやってくる東の果ての国、程度の認識で使節を送った記録は無いようですが、この時代のローマのガラス製品や硬貨がアジア各地で出土しており交流は確かにあったのです。